

## 学習者の視点に立った大学カリキュラム改革の方向性

本間正人

はじめに

少子化・情報化・国際化などのトレンドの中で大学のあり方は急速に変わりつつある。大学全入時代、入学試験の選抜機能は失われ、多くの大学で基礎学力を底上げする補習教育が不可欠なものになった。PCやスマートフォンの普及により、Eラーニングが本格的に広まりつつある。実験や実技指導の大きな位置を占める理系や芸術系であればまだしも、文科系科目において一方通行の講義形式を漫然と続けているだけでは淘汰されてしまう状況が現出している。

また否応なくグローバルな競争にさらされていく世代が未来を切り開いていくためには、これまでの日本社会の常識の枠にとらわれず、正解のない課題を自ら設定し、自分なりの答えを考え、アピールしていくアウトプット能力が不可欠だ。そのためにも「受動的に教わる」のではなく、「自ら学ぶ」力を引き出すカリキュラムへの進化が必要である。

その基本として、教育者が中心になるTeachingの発想から脱皮し、学習者が自ら学び、学ぶ力を伸ばし続けるLearning中心の発想への転換が求められる。その際、教育者の役割はTeachingが従となり、CoachingやFacilitatingが主へと変容していくだろう。キャンパスにおける学びで、特に重要なのは以下の五点であろう。

- (一) 文字中心でなく、ビジュアル、身体感覚、三次元を重視する
- (二) インプット偏重ではなく、アウトプットとのバランスをとる
- (三) グループワークなど相互コミュニケーションの機会を増やす
- (四) Eラーニングや情報機器、SNSなどを活用したBlended Learningを導入する

(五) 学習者の人生、生活全体を視野に入れる

つまり教育者は、自分が担当する科目のシラバスを意識するだけでなく、学習者の一週間一六八時間、人生八十余年を念頭に置いた発想を持つ必要がある。こうした取り組みが、キャリア支援、就業力の向上に寄与するのだ。以下では、上記の五点に即して、今後のカリキュラム設計に対する提案内容を詳述したい。

### 一、ビジュアル、身体感覚、三次元の重視

第一に、多様な学習スタイルをもった学生がいることを前提にカリキュラムを設計し、授業を行うことが大切である。一般に、大学の授業は、文字が羅列された教科書を使用して一方通行の講義を行い、学生にノートをとらせ、レポートを書かせるという構造をもつ。この講義形態は、言語優位ならびに論理優位の学習スタイルを有する学生には適合するが、必ずしもそのような学生ばかりではない。

学習スタイルに関する先駆的な研究としては、ハーバード大学の著名な教育心理学者であるハワード・ガードナーが提唱した「Multiple Intelligences (MI) 理論」が一つの有力な視座を提供している。MI理論は、人間の能力を八つの分野に分類し、人それぞれに得意分野・苦手分野があり、それに合致した学習スタイルで学べば効率が良い、という考え方だ。

学習スタイル論はガードナーに限らない。卓近な所では朝型・夜型の違いも顕著に見受けられる。また、「一夜漬け」が得意な「集中型」の学生もいれば、コンスタントに課題をこなすのが得意な「平均分散型」の学習者もいる。多様な学習スタイルの存在を大学教員が意識することが非常に重要なのだ。

たとえば、本学には視覚優位な学習スタイルをもつ学生も多数いるので、彼らに対しては、学習している内容をどれだけビジュアルに構造化して伝えるかという点を意識する方がよい。箇条書きにするよりも、図解・年表・チャートなどを使うと理解度を高めることができるだろう。

現在は、写真や動画などのビジュアルサポートの技術を安価かつ簡便に利用できる環境が整っており、それらの技術をおおいに活用するべきである。京都造形芸術大学はこのような実践を比較的積極的に行ってきた。たとえば、美術史の授業で学生にスライドを多く見せたり、語学の授業で映画や舞台の映像を上映したりしてきた。このように多様な学習スタイルの学生を想定した授



ハワード・ガードナー（1983）のMI理論を  
元に本間正人が翻案

図1 多面的な能力

業を実施してきた点は評価できるし、同様の実践がますますとり入れられていくことが望まれる。

また、身体知の視点も非常に重要である。「頭でわかる」ことと、実際に「できる」ことの間には大きなギャップがある。学習を通じて理解したことを実際に行動に移すことができれば、実社会では役に立たないのだ。

たとえば、英語や国語などのコミュニケーション・スキルは、理屈は頭で分かっているにもかかわらず使えないケースが非常に多くみられる。このような能力は、発声、表情、ボディランゲージも含めたコミュニケーション体験をしないかぎり、身につかないと言える。一方通行の講義形式ではなく、参加・体験型の進め方がさらに浸透していくことが望ましい。

三次元もまた、今後の授業形態におけるキーワードである。現在、すでにEラーニングが広く普及しており、その隆盛は、国内の放送大学の例に明らかであろう。放送大学で提供されている一般教養科目のクオリティは高く、ビジュ

アルサポートも効果的に使われていて、一方通行でも飽きさせない工夫が数多く行なわれている。

海外に目を移せば、二〇一三年の三月からはハーバード大学とMIT（マサチューセッツ工科大学）が合同で運営しているオンライン学習プロジェクトedXが正式発足し、二十四のコースを世界中の人々に無料で提供する試みがなされつつある。米国西海岸でも、スタンフォード大学ではコンピュータサイエンスの講義のうち、三つのコースをオンラインで二〇一一年から無料公開している。つまり、インターネットに接続できて、ある程度英語の能力があれば、MOOC（Massive Open Online Course、大規模講義）を通じて世界最高峰の授業を無料で受けることができるのである。大学の授業が、知識を伝授することに終止するのなら、こうしたトップクラスの教育機関と競争しなければならないのだ。

しかし、現在のEラーニングには、身体知がなかなか入らないという限界がある。現在のテクノロジーでは、画面が平面的であるため、授業の動画を見ているだけでは、どうしても二次元の学びになってしまうのだ。三次元の学びを取り入れていかなければ、キャンパスに通学して学ぶ必然性も乏しくなり、その結果として、地方都市に立地し、ブランド力が低く、低偏差値の文系私立大学が加速度的に淘汰されていくのは間違いない。

この問題に対処するため、実演、実験、実践、実地など、英語の「real」に対応するような「実」を冠した学びの形態こそが三次元の学びであり、その重要性は今後ますます高まっていくだろう。

## 二、インプットとアウトプットとのバランス

今後のカリキュラムの方向性として、インプットとアウトプットとのバランスをとることも不可欠である。アウトプットの重要性は英語学習に特に顕著にあらわれる。

大学入試の英語のセンター試験では、インプット形式の学習履歴を試されるMultiple Choice形式の筆記問題やリスニング問題が出題される。また、ビジネス英語のスタンダードであり、大学生の就職活動時の判断基準になることも多いTOEIC®テストも、基本的に読解とリスニングの試験だ。

かつてはTOEICのスコアと英語の実践的な運用能力との相関関係があったのだが、現在はスコアと実力との間に顕著な乖離が見られるようになった。

その理由は、TOEICの傾向と対策を分析する数多くの書籍が出版され、またTOEICの予備校も非常に多くあるので、特に偏差値の高い大学の学生たちにとって、英語のアウトプット能力がそれほどなくても高スコアをマークすることが比較的容易になったためである。その結果、高スコアを獲得していたとしても、英語を実際に話すことがほとんどできないという学生が多くなってしまった。

このような現状に即してか、英語のアウトプット能力の試験が注目を集めつつある。これまでアウトプット能力を評価するのは技術的・経済的に困難だったために、アウトプットの試験は従来それほど見られなかった。しかし、TOEICに関しては、近年speakingとwritingのテストが登場し、コンピュータを通じて受験者のアウトプット能力を問う仕組みが確立してきたのである。

TOEICのSWテスト(speakingとwriting)の試験を、就職時の判断基準として大規模に採用している日本企業はまだ少ないが、たとえば韓国のサムソン電子は、これを新入社員の採用基準に採用している。これは、英語の発話能力が、読解力や筆記力など英語の総合力との相関関係がもともと高いという事実に即しており、おそらく日本でも今後は発話力に代表されるアウトプット力をこれまで以上に重視する傾向になることは間違いない。

実際、インプット系の試験の限界を企業人はすでに気付いており、それに対応する形で、英検(公益財団法人日本英語検定協会)と上智大学が共同開発するTEAPという試験も登場している。

また、自民党の教育再生実行本部は、スピーキングとライティングのテストを含むTOEFL®を大学入試に採用すべきという提言を行なっている。ただし、TOEFLはそもそも米国大学への留学志望者のための試験であり、難易度が極めて高い試験なので、日本の普通の高校生が太刀打ちできるレベルではない。また、アメリカの大学の授業を模した出題形式なので、この種のアカデミックな英語に対してニーズを感じる日本人は少ないだろう。従って、この提言がこのまま採用される可能性は低いと思われるが、社会の趨勢として、アウトプット能力を評価するようになっていく傾向にあることは間違いなく、その傾向に即して大学でもアウトプット能力の養成を重視することがますます重要になっている。

筆者の個人的な見解としては、中学校・高等学校・大学での英語は選択制に

すべきであると考えている。すべての生徒・学生が、ニーズを感じないままに「英語を学ばなければならない」という義務感で授業を受ける状況では、英語に対する苦手意識だけを学生に植えつけることになってしまいうだろう。

英語教育の分野ではアウトプットの機会を増やす授業実践として、嘉悦大学では、株式会社ワークワークの「スカイプ英語」のプログラムを採用している。

これは、トレーニングを受けたフィリピン教師を正社員として雇用し、日本の大学の実情に合わせたプログラムをカスタマイズして提供する試みであり、従前に比べて、学生の出席率が圧倒的に向上したことが報告されている。

また、国語の分野では、筆者自身が二〇二二年度後期に京都造形芸術大学で担当したアウトプット系エクササイズを取り組みについて紹介したい。常用漢字の学習を授業のテーマとし、まず登録した学生全員にニンテンドーDSと漢字検定対策のソフトウェアを貸し出した。

そして、漢字の書き取り練習は自学自習にまかせ、授業中はアウトプット・エクササイズの実践に力を注ぐという進め方を行なったのである。たとえば、「シン」と読む漢字をリストアップさせるグループ・エクササイズでは、もともと国語を苦手と感じている学生でも、かなりの数の漢字を知っていることに気づき、その場で思い出せなかったとしても、読めるということを実感する機会になった。平均的な大学生が知らない漢字は、使用頻度の低いものが多く、それらを新たに教えるよりも、むしろすでに知っている漢字をリストアップさせた方が、漢字を活用する能力の向上につながり、学習意欲も高まる。

また、他の学生と結果を比較するグループワークを通じて、「向こうのチームの方が自分たちより多くの漢字をリストアップできていて悔しい」というような感情を学生にもたせることにもつながった。感情を伴う学習は長期記憶に定着しやすいということは脳科学の定説であり、アウトプットの実践は、一方通行で漢字を覚えさせる講義よりもはるかに効果的であると考えられる。

授業内ではさらに、新しい漢字や四文字熟語を学生に創作させるという実践もおこなった。新しい漢字の作成には部首の知識が必要であることから、このワークの過程で、形声文字や会意文字などの文字の成り立ちについて学習することができるのである。

京都造形芸術大学の学生は、物づくりに情熱を有している学生が多いため、こうした実験的授業に非常に熱心に参加してくれた。実際、自分で作った四字



熟語を消しゴムに彫り込んだスタンプを作って報告してくれた学生もいたほどである。このように、ワークを通じて漢字に対する興味関心がわき、自ら学ぼうという学習意欲が高まったと言えることができるだろう。

この例からも明らかなように、アウトプットによって授業テーマに対する関心がわき、さらなるインプットへの動機が高まるという循環が存在している。インプットを強制するだけでは、学生を勉強嫌いという状態に追い込む可能性が高く、次なるインプットを求める動機につながりにくい。いわば、講義を通じて、知識に対する欲求あるいは自発的な学習意欲に気づいてもらうことが重要なのである。

そのためのカリキュラムや授業形態を実現するために、筆者は、教員の教育力を高めるための研修 (Faculty Development : FD) を、京都造形芸術大学、東北芸術工科大学をはじめとする複数の大学で担当してきた。雰囲気や和らげるための「ice breaking」などは、どんな専門分野でもあてはまる普遍的な内容だが、今後はそれだけではなく、各教員がそれぞれの担当科目のなかで実践できるアウトプットの形態を提案している。

たとえば美術史の授業や文化財の修復学科など、多様な専門科目にカスタムメイドで対応するアウトプット・エクササイズを教員とともに作っていくようなコンサルティング的なFDが、今後ますます必要になっていくだろう。

### 三、相互コミュニケーションの増加

既存の授業形態が有する問題の一つとしては、教員と学生たちとの直線的な「スター構造」が人間関係のメインで、学生同士の横のつながりがほとんどなかった点を挙げることができる。新しいカリキュラム設計にあたって、「ネットワーク構造」または「セミラティス構造」と呼ばれる横の絆を深め、ピア・ワークやグループワークなどを通じて相互にコミュニケーションをとりながら学ぶことが欠かせない。

その第一の理由は、企業が一番求めているものがコミュニケーション能力であり、コミュニケーション能力の獲得が就職に役立つからである。知識量は試験には役立つものの、人間は知識量という点では最終的にグーグルやウィキペディアなどネット上のリソースにはかなわない。知識を使いこなす能力は必要だが、知識をどれほど持っているかという点は従来ほど評価されないのではあ

る。したがって、学生がコミュニケーション能力を磨くために、大学の講義のカリキュラムがコミュニケーション能力を高めるようなものになっていなければならない。映画概論、演劇史、造園の基礎など、どんなテーマの授業であっても、他者とのコミュニケーションをとりながら学ぶ必要があるのだ。

第二の理由は、相互のコミュニケーションが学習効果を高めるからである。教師の言葉を一度聞いて理解できる学生もいるが、教師の使う専門用語を学生がただちに理解できないという学生も少なからず存在する。教師の言葉を日常的な「自分たちの言葉」に翻訳し、説明してくれる仲間がいることが重要であり、このような「ピア・ラーニング」のメカニズムを取り入れた方が、落ちこぼれを作りにくいのである。

これについて具体的には、『声に出して読みたい日本語』の齋藤孝が提唱している「再生方式」の導入を提案したい。再生方式とは次のような方法である。まず教師のレクチャーを全員が一所懸命ノートにとる。次いで、学生Aがノートを見ないで学生Bに講義内容を話し(「再生」、Bが話の内容を確認し、

- (0) 全員: ノートをとる
- (1) Aさん: ノートを見ないで再生(3分)  
Bさん: ノートを見てチェック
- (2) B→A: 確認フィードバック(1分)
- (3) Bさん: ノートを見ないで再生(3分)  
Aさん: ノートを見てチェック
- (4) A→B: 確認フィードバック(1分)
- (5) 二人で感想を話しあう

図2 再生方式 (明治大学齋藤孝先生が提唱する方法)

Aにフィードバックする。その後、Bが同様に講義内容を「再生」し、Aが内容をチェックし、Bにフィードバックする。このようにお互いに確認しあうことで、学生たちは同じ講義内容を要約の形で三回聞くことになるのだ。

本来、大学における学びは、建前上、多くの自習時間を確保することになっている。一単位あれば、それと同じ時間あるいは倍の時間を自学自習にあてることになっているのだ。しかし現実のところ、特にいわゆる低位校では、自学自習は実行されていないことが多い。復習しないと長期記憶に残りにくいため、自習時間の欠如は大きな問題だと言えるだろう。

この問題に対処するために、授業内に教えられる内容が若干なくなったとしても、再生方式によって授業中に講義内容を三往復することは効果的だと考えられる。また、再生方式はアウトプットの実践を、一方通行の講義形式で行なわれた授業に導入することが用意だ。

再生方式は、ラーニング・バイ・ティーチング (learning by teaching) という効果、すなわち他者に説明することによって深く学べるという効果も期待できる。さらに、再生方式にはゲーム感覚も入っているもので、「相手が覚えていたのに、自分が覚えていないと悔しい」などの感情にもとづく切磋琢磨を通じて学習効果を高める付随作用もある。筆者はこのような実践を国語や英語の授業で実践しており、他の教員にも紹介してきた。

いきなりワークショップ形式の授業に転換することは難しかったとしても、再生方式やダイアログ（ペアワークやグループディスカッションで学生が話し合う時間を設ける方法）ならば、比較的簡単にとり入れることができるだろう。

#### 四、Blended Learning の導入

先述したニンテンドーDSは、スタンド・アローン (stand alone) つまりネットワークに接続していない最も素朴なEラーニングの手段である。常用漢字二〇〇〇字を読み分けるほどの性能を有し、旧式だとソフトウェアも合わせて三〇〇〇円程度で購入できる。大学授業一コマ分の費用と同等の安価で入手でき、すでに自分で所持している学生も多い。ニンテンドーDSのほかには、スマートフォンも間違いなくEラーニングのプラットフォームとして活用されていくだろう。

現在の停滞気味の景気状況を反映して、大学近隣に下宿するのではなく、長

距離通学している学生が全国的に増えている。実際、本学にも、片道二時間をかけて通学している学生も多い。このような長時間にわたる通学時間を有効に活用するためにも、課題の一部をEラーニングにするなどの実践が非常に合理的だと言える。

かつては自前のEラーニングプログラムを作ろうとすると数百万円の費用がかかり、文部科学省の科学研究費補助金を申請するなど煩雑な手続きが必要だった。しかし、現在はパワーポイントのスライドのみ作成すれば、三万円弱でEラーニングのプログラムを作成するソフトが開発されている。このようなソフトを活用すれば、たとえばパワーポイントで授業の構造を学生に見せた上で、回答選択形式の確認テストをスマートフォンで学生に配信する試みなども実施できるだろう。Eラーニングで知識を予習し、授業中はそれを踏まえた対話を行う「反転授業」も確実に広がっている。

Eラーニングの重要性がとくに際立つのは、他者の感情を読みとりにくく、他者とのグループワークなどを苦痛に感じる学生に対応する時である。こうした学生は、一般の大学で一〇パーセント程度は存在していると言われている。京都造形芸術大学では、平均値よりも高い割合になっているのではないかと感じている。このような学生に対しては、前節で述べたような「グループワーク」や「ピア・ラーニング」は効果的ではないため、個別に対応する際には、教室内での講義だけではなく、補習授業としてEラーニングのプログラムを用意しておくとういだろう。

同様に、一番学習速度が遅い学生に十分な学習の機会を与えるためにも、授業の復習をかねて、授業と並行するEラーニングの補習プログラムを用意することが、とくに偏差値の低位校では今後必要不可欠になっていくに違いない。大学教師は理解の早い学生に学習速度を合わせてしまいがちだが、低位校でそのような授業をすると、留年者や中退者が増えてしまうからである。

Eラーニングの一環としては、SNSの積極的な活用も提案したい。ピア・ラーニングの場合においても、教室では全く発言・質問できなくても、facebook や twitter 上では別人のように饒舌になる学生がいる。同様に、発表やレポートにしても、他者に顔が見られない場であるという者もいる。したがって、教室での学びがすべてではなく、仮に学校に来られなくても、学生による独自の学びを評価するようなメカニズムをSNS上に確保することが求

められるだろう。

これは学生を甘やかすことではなく、今の社会のトレンドへの対応上、必要なことだと考える。このような学生は対人コミュニケーション能力が十分に発達していないので営業職などには向かないが、コンピュータプログラミングや、アニメーションの彩色など、単独でできる職人的仕事には適性をいかにく発揮するからである。多様な得意分野を持ち、様々な進路に進む学生たちに継続して学ぶチャンスを与えるためには、従来型の授業形式だけではなく、オルタナティブな道として、SNSの利用も今後ますます重要になっていく。

教師として働くなかで一番残念なのは、学生の出席率が低下することであろう。学生が欠席する理由をたずねる場合、Facebook上にグループを作成して授業の情報を流したりすると、当該学生から返事を受けとれることがある。このように、デジタル・ネイティブ世代の学生の実情に合った授業運営の仕方を編み出していくことが必要であり、教師は一週間の時間割で自分が担当する授業だけを考えていれば良いという時代ではないのである。

## 五、学習者の人生・生活全体にたいする想像力

学生の就職状況に目を向ければ、就職超氷河期の現況にあつて、学生の就職状況は厳しく、仮に就職できたとしても非正規雇用である場合が多い。さらには、三年以内の離職率も非常に高い状況にある。学生の親世代は比較的裕福な場合が多いので、家庭にひきこもったり、ニートやフリーターとして生活したとしても、ただちに経済的に破綻することはない。しかし、若い頃に能力開発のチャンスが乏しいと、生涯賃金の点で非常に大きな差がついてしまう。また、若い頃に社会的経験を積むチャンスが少ないと、結婚率も下がり、日本全体で見れば少子化という問題にもつながる。

したがって、大学卒業を目の前にして、面接対策やエントリーシートを書くための小手先の就職指導を行なうだけではなく、本来の意味でのキャリア教育、人生八十余年を見通したキャリア・プランニングに対する需要が高まっていると言えよう。

多くの大学でキャリア部門は学部・学科から独立していて、それぞれの専門学科とはほとんど連携がない。しかし、必要なのは、各専門学科の教員が学生の就職について高い意識を持ち、様々な知識や技能などを伝授する中で、その

知識や技能を就職とリンクさせて学生に提示することである。ところが、残念ながら、大学教員は就職活動の経験をもたない人が一般的に多い。とりわけ本学では組織に属したことの少ないアーティストが多いため、就職とはどういうことなのか肌感覚でわからない場合が少なくないのが実情である。

したがって、FDの一環として、それぞれの専門的学科の講義に合わせてカスタマイズしたうえで、就職とのつながりを学生に伝えていくことが重要となってくる。これは、映画学科の学生の就職と、空間デザイン（造園、建築など）分野の就職、あるいは演劇関連での就職では、まったく事情が異なるからである。たとえば、演劇分野だけに限定して進路を探すと就職が非常に難しい場合には、社会の他の領域で演劇的素養を活かすように学生を意識づけることが重要になってくるだろう。

このように、学生が置かれている厳しい状況のみならず、就職の仕組みについても、教員が理解をもっている必要がある。たとえば、採用プロセスとしては、エントリーシートを書いて面談するというだけではなく、グループ面接を行なう会社、ディベートを課する大企業、インターンシップによって若干名を採用する組織などがあり、昨今の就職事情は多様化しているのである。

大学教員は、えてして、自分の担当する専門分野だけを意識して教育活動を行うことが多い。その専門性は重要なことである一方、自分の担当するテーマについて、一斉授業を行なうだけでは、大学の講義自体がEラーニングに淘汰されてしまう危険性をはらむのだ。したがって、既存の授業観ではなく、「一人ひとりの学生のテーマをサポートする」という視点を教員が持つことが必要不可欠なのである。

一週間一六八時間のうち、教員自身が大学で授業を行うのは八十分の七コマ分の時間かもしれないが、それ以外の時間帯に、学生はアルバイト、通学、恋愛、ゲーム、就職活動、家事など様々な活動に時間を費やしている。学生一人ひとりがどのような生活を送っているかについて、教員は深く思いをはせる必要があるのだ。

関連して、コーチングの世界では「ペーシング」（ペースを合わせる）という概念がある。相手を深く知れば、誰に対しても同じという伝え方ではなく、相手に合わせた伝え方ができるという意味である。たとえば二〇一三年度に入学する一人ひとりの学生は、男子学生ならばすでにモーニング娘ではなく、AK



B、SKE、もいろいろクロバーZなどに関心があり、女子学生ならプリキュアを観て育ってきた世代である。そのような世代ごとのバックグラウンドを知っていると、同じ内容を伝える際に、何げない事例やエピソードの引用方法という点だけでも学生に対する親和性が高くなり、重要な情報を効果的に伝えることができるだろう。

先述した「本来の意味でのキャリア」とは、一人ひとりの学生が有する八十余年の人生全体を指している。大学生は、大学四年間や就職という区切りで発想が止まっている場合が多く、さらに悪い場合、ブランド大学の学生の中には入学時点でビジョンが停止してしまっている学生も散見される。大学では、そのような現状に対して、八十年間学び続けるという意識を伝えることが必要なのだ。

学習学の立場から言えば、「最終学歴」ではなく「最新学習歴」こそが重要なのである。変化の速度が緩やかな時代には、「最終学歴」までに学んだことで人生を送っていくことができたかも知れない。しかし、世界情勢が激変し、「知識の半減期」が一年を切った現代社会にあつては、過去の知識のストックに安住するのではなく、フローの知識を常に吸収し続け、スキルを磨き続ける「最新学習歴の更新」をしなくては、自己の陳腐化を防ぐことができない。

また、学ぶチャンスがいくらでもある現在、文部科学省が認定した学校を卒業する時だけに得られる「学位」も大事だが、こうしたフォーマルな形には表れない「ソフトな学び」を含めて最終学習歴を更新し続けることが誰にとっても必要なのだ。その中には、「円滑な人間関係を築く」「美しいものを美しいと感じる」「失敗しても、すぐに立ち直る」など、教師が教えようとしても、教えられない「学び」、人生経験を通じて初めて身につけることができる「学び」の世界があるのだ。

大学入学は、大学内外で学ぶことの両方を視野に入れつつ、最新学習歴を生涯にわたって更新していくスタート地点に立つことを意味する。したがって、とくに新入生には、大学で受動的に教わろうと思うのではなく、自発的に学ぼうとする意識をもってもらわなければならない。一生を通じて学び続けていく「学ぶ力」を身につけさせることが、教育機関の使命なのではないだろうか。

高校までの授業や大学入試では答えが一つに決まっている問題に取り組むのだが、大学における試験や社会での課題の大半は、答えが一つに決まってい

ない。自分なりの意見を生みだして他者に伝える能力こそが重要であり、その意見は、「正／誤」ではなく「良い／悪い」「売れる／売れない」「評価される／評価されない」というような社会的な審判のなかで判断されていくのである。

学生には、教員の用意した答えと一致しているかどうかを重視する学びの段階は終わったのだということを伝える必要がある。逆に大学の教員も、高校の延長のような授業をするべきではなく、実社会で求められる能力の開発を意識した授業をおこなうことが求められているのだ。したがって、一般教養、専門科目、実技科目などのすべてを通じて、学生の人生の長きにわたり役に立つ、総合的な能力を高めるカリキュラムにしていくなが必要であると言えるのである。

## おわりに

学習学の観点から言えば、すべての学びは総合学習である。京都芸術造形大学には、「ミスター文科省」と呼ばれ、総合学習を推進した寺脇研教授が在籍しておられる。「ゆとり教育」という言葉は、マスコミによって歪曲され、結果的に残念な使われ方をされてしまう場面が多かったが、総合学習という考え方には全面的に賛成である。その理由は、今後の望ましいカリキュラム設計において、どんな科目・学科を担当している教員にも総合的視点をもってもらうことが不可欠だからにほかならない。

ここで言う総合的視点とは、たとえば、学際的 (interdisciplinary)、国際的 (international)、世代間的 (intergenerational)、相互関係的 (interactive) といった、「inter」を接頭辞とするような複合的視点を意味している。

今後は、このような方向性に向けてカリキュラム設計をしていくとともに、教員の教育力向上のためにFDの実践をも継続的に発展させていきたいと考えている。

また、学生の入学時点の学力の低下を嘆く声も耳にするが、むしろ、カリキュラムのバージョンアップの中で、教職員サイドで何ができるか考え、話し合う組織風土を醸成していくことが望ましい。

二〇一三年度は、新入生オリエンテーションを担当させていただき、「大学で学ぶ意識」「ノートをとる重要性」「正解が一つに決まっていない世界で創造

性を発揮する」「ストレスマネジメント」「挑戦することから学ぶ」など、四年間の大学生活に活かせるメッセージを伝えさせていただいた。何のために学ぶのか、どのように学べば良いのか、ということは、学生にとって決して自明のことではなく、自らふりかえり、仲間や教員と語り合うことにより、初めて浮かび上がってくる性質のものである。

二〇一四年度以降も、新入生の目線、学生の視点に立って、モチベーションの高まるようなカリキュラムを実現するために微力を尽くしていきたいと考えている。

#### 参考文献

Gardner, H., *Frames of Mind : The Theory of Multiple Intelligences*, (University of Michigan, 1983)



## **Toward a University Curriculum Reform Based on a Learner's Perspective**

**HOMMA Masato, Ph.D.**

The university curriculum needs to be updated in the face of demographic changes, advancement of information/communication technologies, globalization and other social trends. The college entrance examinations have lost their competitive selection functions, and an increasing number of untraditional students enter institutions of higher learning.

The author has been advocating “Learnology,” a new science of life-long, life-wide, and life-deep science of learning, vis-à-vis “education” which has been developed as a discipline of teaching predominantly in a school classroom setting. A paradigm shift from a teacher’s perspective to a learner’s one calls for a change of the roles of an educator from teaching to coaching, facilitating and mentoring.

The following five directions are important in innovating the university curriculum.

- a) Emphasizing on experiential learning, taking advantage of five senses rather than letting students read texts.
- b) Encouraging more output, less input in classes, introducing a flipped classroom for example.
- c) Adopting a variety of group-based mutual learning exercises.
- d) Implementing blended learning, utilizing various E-learning platforms, high-tech devices and social network systems.
- e) Putting each learner’s life as a whole in perspective rather than focusing on classroom teaching hours.

Educators today should be aware that the syllabus they are in charge of represents only a small part of learners’ wide range of life-wide learning. While trying to understand what’s happening during the 168 hours of each student’s week and 80+ years of their life, we at KUAD need to invent a new dimension of university curriculum.